

鹿児島県離島振興協議会  
平成26年度アイランドキャンパス事業  
成果報告書

—都市と離島を結ぶ職業体験型口永良部島スタディーツアーの実践に  
よる離島活性化モデルの段階的構築—

慶應義塾大学  
長谷部葉子研究室

## ■事業目的

現在口永良部島には、口永良部島出身の若者世代や島への移住を希望する人々に対する職がほとんど存在しないため、島への移住に関してハードルが高くなっている現状がある。そこで、現在島にある専門性を活かした新たな職の機会の創出と提供を目指し、島民と首都圏や大学などの専門機関が連携しながら、Iターン、Uターン者が島で仕事を心得てそこに移住できるような環境を創り出すことが当プロジェクトの最大の目的である。

現在、口永良部島では移住者に対する新たな職がない一方で、若年層の欠如や人手不足が深刻化している。そのため、職の創出やIターン、Uターン者の増加を目的としたプログラムを行うことによってそれらを軽減させる人的サイクルを島民の方々に負荷をかけない形でつくる必要がある。そこで、これまで当プロジェクトが口永良部島と関わってきた中で最も実現可能性が高いと考えられる教育観光ビジネスと、島民が既に着手し始めている夜光貝アクセサリー、ジャムづくりをストーリーマーケティングの観点から販売する仕掛けを組み合わせることで、経済的に潤い、また夜光貝、ジャムなどの商品自体が口永良部島の広報としての機能を果たすため、島の認知度の増加、それに伴う交流人口・中長期滞在者の増加も見込むことができ、人的にも潤うシステム創りが出来ると考えている。

## ■事業内容

都内の郁文館高等学校の高校生を対象とした職業体験型口永良部島スタディーツアーを実施する。職業体験型スタディーツアーとは、これまで私たちが島民の方々と協働で行ってきた教育研修ビジネスと、現在注目している職の創出という二つの要素を組み合わせたプログラムである。教育研修ビジネスとは、人口約 140 人という環境である口永良部島に高校生が訪れ、その生活を島民の方々とともに実体験する中で、自分自身を見つめ直したり、コミュニケーションやコミュニティの大切さを感じたりと、都会ではできない経験や学びによって成長することができるプログラムである。この教育的価値は実証されつつあり、現在このプログラムに参加している郁文館高等学校のみならず、他の団体にも教育研修ビジネスを提供できるよう、模索している最中である。この教育研修プログラムを行うことによって、島民は2つのメリットを得ることが出来る。1つ目は、ホームステイ受け入れによって収入を得ることが出来ることである。2つ目は、高校生が最終日に島民を前にした発表会を行うことで高校生の成長を実感でき、島の魅力を再確認できることである。

今回はその研修ビジネスの中で、職創出のきっかけとなるような職業体験を実施する。職業体験とは、高校生が島民の方々の家にホームステイをさせていただき、現在島に存在するいくつかの仕事についてその島民の方々に指導していただきながら経験するというものである。島民と高校生大学生がここで生産し商品に関して、高校生と大学生が一緒になりながら販路を開拓し、ビジネスとしての可能性を創り出す。実際に、成果物は東京都内で販売される予定である。要するに、島民の方々は、高校生に対する指導者としての立場と、成果物の

生産者としての立場という二つの役割を担うことになる。また、高校生と大学生は、都内での販路拡大と広報という立場を担うことになる。

#### ■事業責任者

長谷部葉子環境情報学部准教授

池田靖史政策メディア研究科教授

#### ■事業遂行主体

口永良部島島民の皆様

長谷部研究室（9名）

環境情報学部4年 横山由佳

総合政策学部4年 高畑翔

総合政策学部4年 平田大樹

総合政策学部3年 富永真之介

総合政策学部3年 河田紗弥

総合政策学部3年 菊地雄平

総合政策学部3年 園田隆成

環境情報学部3年 永由裕大

環境情報学部3年 遠藤紅実

池田研究室（5名）

政策メディア研究科1年 渡部ひかり

政策メディア研究科1年 鄭大豪

環境情報学部4年 立山蘭

環境情報学部3年 檜木慎一郎

環境情報学部3年 千葉直也

郁文館グローバル高等学校一年（10名）

#### ■連絡先

長谷部葉子研究室

〒252-0882

神奈川県藤沢市遠藤5322 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス o507

## ■はじめに

今回、私たちは8月1日～8月9日の期間に鹿児島県口永良部島に大学生14人高校生10人の総計24人で訪れることを計画していた。しかしながら、8月3日に口永良部島新岳が噴火をし、大学生高校生の大半が口永良部島に訪れることが出来なくなってしまった。高校生、大学生の一部は屋久島にて足止めを受け、口永良部島で行う予定であったコンテンツを出来る範囲で行った。先に口永良部島に入っていた大学生は噴火以前の口永良部島にて活動をおこなった。そして、フィールドワーク後も東京都内や口永良部島にて多くの活動を行った。そこで今回成果報告をするにあたり、1枚目で8月1日から8月5日の間のフィールドワーク期間に行った成果について、そして2枚目でフィールドワーク後に行った成果について報告させていただきたい。

## ■フィールドワーク期間中の成果

私たちは口永良部島出身の若者世代や島への移住を希望する人々に対する職がほとんど存在しないため、島への移住に関してハードルが高くなっている現状があるという問題意識を掲げ、現在島にある専門性を活かした新たな職の機会の創出と提供を目指し、島民と首都圏や大学などの専門機関が連携しながら、Iターン、Uターン者が島で仕事を得てそこに移住できるような環境を創り出すことを目的に以下の4プロジェクトを運営する予定であった。

### ① 夜光貝アクセサリ作り・販売プロジェクト

口永良部島ならではの品質な夜光貝を用いたアクセサリ作りとその販売促進販路開発を行う。ここでは、実際に夜光貝を採るところから加工、マーケティングまでを全て行い、その後ストーリーマーケティングの手法に基づいて実際に東京都内での販売を行う。

### ② ジャム作り、販売プロジェクト

自然の恵みを生かした季節ごとのジャム作りと販売促進と販路開拓を行う。ここでは、季節ごとの果実の収穫から加工、ラベル作成、マーケティングまでを行い、その後夜光貝同様ストーリーマーケティングの手法に基づいて実際に東京都内での販売を行う。

### ③ 口永良部島：自然の恵みを生かした生活体験プロジェクト

「生きる力」を島生活から学び、その学びと魅力を発信する。都会では経験することのできない生きる力を学び、それを伝える効果的な広報活動を考え、実践する。また、島の資源を使って島独自の料理作りも行う。

### ④ エコロジカル仮設シャワーブースプロジェクト

現地の自然素材（竹）とデジタルファブリケーション技術を融合させ、仮設シャワーブースを制作する。一時的に増加する訪問者による島の環境負担をできるだけ削減するために外部からの持ち込みを制限し、ものづくりを行う。シャワーで使用するお湯は太陽光によって水温を上昇させ作り、シャワーブースは3Dプリンターを用いて作ったジョイントに自然

素材である竹をはめ、編み込む構造で建設する。また、古民家の清掃や瓦修復作業など、島における労働力を必要とする作業のお手伝いも行う。

しかしながら、前述の通り噴火の影響で屋久島にて足止めを食らい予定の変更を余儀なくされたため、コンテンツの一部を変更し、屋久島にてそれぞれのプロジェクトが当初の目的になるべく近い形の活動を行った。まず、大学生の活動スケジュールを記載したうえでその後、それぞれのプロジェクトが行った活動を時系列でまとめていきたいと思う。

## ■口永良部島フィールドワーク全日程

7月31日

大学生が屋久島に到着する。翌日8月1日が口永良部島研修に参加する高校生到着日であったため、明日に向けた打ち合わせ、フェリー太陽が翌日も欠航しそうだという予測であったため各チーム島民の方と行う。

8月1日

台風の影響により高校生が鹿児島にて足止めを食らった。屋久島も台風の影響で外に出ることも厳しい状況であった。本来の予定では8月1日の段階で高校生は現地入りしている予定であったため、プログラムの変更、それに伴い実際に作る各チームの変更を島民の方と話し合いながら行った。この日もフェリー太陽は欠航。

8月2日

高校生が屋久島に到着した。高校生を宿泊先の宿に出迎えた後、高校生に対し口永良部島の魅力を考えるワークショップ、口永良部島で何をするのか、屋久島と口永良部島と都心との違いは何かなどの講義が行われた。高校生と大学生で明日行う作業工程の確認、口永良部島に到着してからの流れなどを確認した。この日も台風の影響からフェリー太陽は欠航。

8月3日

口永良部島噴火。口永良部島の新岳が噴火したとの連絡が入り、島民との連絡取りをしようと試みていた。また、噴火が起り、安全のため高校生を口永良部島に連れていくことが出来ないと担当教諭が判断した。そこで、屋久島町役場の方にお問い合わせをして各チームの活動を代わりに出来るような場所を探してもらった。結果、各チームとも替わりの活動をさせてもらうことが可能になった。

8月4日

この日は各チームが屋久島にてそれぞれのチームが活動を行った。詳しい各チームの活動に関しては下記に記載する。

8月5日

高校生が東京へ帰る。そして、大学生の一部もここで東京へ戻ることとなった。また、帰らなかった大学生は島に残り、避難してきた島民に炊き出しを行いそこでコミュニケーション

ンをとった。

## ■各プロジェクトが行った成果

### ① 夜光貝プロジェクト

屋久島では、お土産として販売されている夜光貝アクセサリーのデザインや販売方法の散策を行った。また、実際に屋久島にある工房で、慶應大学として購入した My 夜光貝でアクセサリーを作った。屋久島で高校生が夜光貝アクセサリーを作るため工房を訪れた際、口永良部島産の夜光貝の大きさに驚いていた。そこで、口永良部島産の夜光貝の魅力を確認出来た。加えて、夜光貝を加工する過程（貝からアクセサリーになるまでの過程）をビデオに収めることで後述の郁秋祭における夜光貝販売（2 枚目に記載）の魅力高めるという役割を担うことが出来たと考えている。

### ② ジャム作りプロジェクト

ジャム作りプロジェクトは、口永良部島で島民の方と共に口永良部島の果物を使ったジャムを作り、口永良部島の広報となる特産物を作る予定であった。しかしながら、口永良部島を訪れることが出来なかったため、宮之浦加工グループという屋久島の特産物であるたんかんやぼんかんなどのフルーツと不純物の少ない超軟水を使用して、ジャムやゼリーなどの商品を作っている工場に伺い、作業の見学及び体験をさせていただいた。屋久島だからこそできることを仕事として行い、地域活性化のきっかけとなることを目指していて、自分の地域を、特産物を使用した商品を通して、知ってもらおうという想いを持っている方々のお話を聞くことが出来た。そして商品から地域を発信するとはどのようなことかを実感することが出来た。

### ③ 生活体験プロジェクト

生活体験プロジェクトは、「生きる力」を島生活から学び、その学びと魅力を発信し、都会では経験することのできない生きる力を学び、それを伝える効果的な広報活動を考え、実践し、島の資源を使って島独自の料理作りを行うという予定であった。しかしながら、口永良部島を訪れることが出来なかったため、屋久島のお茶畑で使用されている道具の製作過程を経験した。そして、実際に畑や工場を見せていただき、解説していただく中で、0 から 1 を創っている現場を肌で感じ、学ばせていた。また、自分たちで 0 から 1 を創る実践として、50 人分の食事を作るためのメニューをコンセプトとともに考え、予算と制限時間がある中で必要な材料を自分たちで想像しながら購入した。実際の調理手順なども、自分たちですべて考え、研修メンバー全員に料理を振る舞った。

### ④ エコロジカル仮設シャワーブースプロジェクト

エコロジカル仮設シャワーブースプロジェクトは、現地の自然素材（竹）とデジタルファブ

リケーション技術を融合させ、仮設シャワーブースを制作する。一時的に増加する訪問者による島の環境負担をできるだけ削減するために外部からの持ち込みを制限し、ものづくりを行う。シャワーで使用するお湯は太陽光によって水温を上昇させ作り、シャワーブースは3Dプリンターを用いて作ったジョイントに自然素材である竹をはめ、編み込む構造で建設する。また、古民家の清掃や瓦修復作業など、島における労働力を必要とする作業のお手伝いも行うという予定であった。

エコロジカル仮設シャワーブースプロジェクトは7月28日に口永良部島に入ることができたため、古民家の掃除、お世話になる島民の方々への挨拶回り、島民である関口さんの協力を元にシャワーブースの建設に用いる竹の収穫と加工、竹の加工に加えシャワーブースの足場となる簀の子作りなどを行った。これらの活動は8月3日までに大方完成した。並行して3Dプリンターで竹と竹を繋ぐためのジョイントの生成を図るが、プリンターの不調により上手くいかず、プリンターを解体して原因を探るなどの処置を施すものの、3日の噴火までに全ての作業を終えることは叶わなかった。噴火後は島民の方々と共に島の復興支援を行った。

フィールドワークは上記のようなスケジュールで活動を行った。自然災害による度重なる変更により屋久島での活動が中心となってしまい口永良部島での活動はほとんどすることが出来なかった。しかしながら、「リスク」、「継続性」などについて考える契機となったため、各人が口永良部島との関係、この経験を口永良部島の活性化にどう生かすかを考え東京に戻ってから様々な活動を行った。その活動について2枚目で記述したいと思う。